

「認知症—終わり」ではない

県大 当事者の丹野さん講演

39歳の時、若年性認知症と診断された丹野智文さん(49)は仙台市がこのほど、高知県立大学で社会学部の学生らに向けて講演した。「認知症イコール終わり」ではない。私は診断から10年たっているけど、こうやって元気にいる。病気に対するイメージを変えていきたい」と明るく語った。

丹野さんは自動車販売会社のトップセールスマンとして働いていた2013年に、若年性アルツハイマー型認知症と診断された。現在は年間180回ほど、国内外で認知症啓発の講演をしている。

丹野さんは異変を感じてからの経緯や診断直後の心境を説明。当時、病気についてインターネットで調べると「2年で寝たきり」「10年で死亡」など絶望的な情報ばかり。1年半ほど泣いて過ごしたが、別の認知症

当事者が笑顔で生活しているのを見て、気持ちを切り替えることができたという。

当事者を取り巻く課題についても言及。施設入所など、本人抜きで決められているケースがあるとして「学生の皆さんも、進学先や就職先を勝手に決められたら絶対に嫌でしょう?」。認知症と診断された途端、本人が取り残される現状があると指摘し「本人が元気に

なれば、周りの家族も幸せになる。当事者の話を聞いてほしいと呼び掛けた。学生の「嫌な声掛けは何



学生に講演する認知症当事者の丹野智文さん
(高知市池の高知県立大学)

ですか」との質問には、「大丈夫?」という言葉を受け、「普通の状態の人には言わない言葉。認知症の人は何もできない、という落第者のレッテルを貼っている」とした。反対にうれしいのは「困った時に『助けて』って言うてくれたら助けるからね」というせりふだとした。

また、認知症になると周囲が心配して本人ができることまでも奪ってしまう、自立を阻んでしまうことがあると指摘。「守られすぎること、機能の低下を招く。できることは自分でするために、どうサポートすればいいかを考えてほしい」と訴えた。(石丸静香)